コミュニケーション・キャンプⅡの実践とその評価

2年次　倉井庸維

2年次クラス替え直後に、1日新しいクラスの人間関係を潤滑にし2年次のスタートがスムーズに切れるように、1年次に引き続きコミュニケーションキャンプを実施した。その実施の様子とアンケートによる生徒の評価を報告する。アンケートの結果から、参加前は余り気乗りがしない生徒が多かったが、終了後良かったと答える生徒が半数ほどおり、実施の効果はあったといえるが、どちらともいえないと答える生徒もおり、課題も残した。来年後以降も実施しノウハウを蓄積していく必要を強く感じた。

キーワード：野外活動、コミュニケーション、実践研究、学年行事、クラス経営

1．はじめに

(1) 問題の所在

本校では、4年前から新入生が、高校生活に円滑に適応できるように、入学式の翌日から、3泊4日で黒姫高原で合宿生活（コミュニケーション・キャンプ）を行ってきた。そこでの内容は、1周30kmある野尻湖のサイクリングや野外散策であるトレッキング、さらには、集団で課題を解決するプロジェクト・アドベンチャー等である。

始めは、不安に感じている生徒もキャンプ終了後には、多くの友人ができ、一様に満足感をもってキャンプを終える。その後早い時期からクラス内の友人が出来、体育祭や球技大会等学校行事を通してクラスへの帰属意識が高まるとともに、クラス内の友人関係や結びつきは、強固になっていく。

一方、本校では2年次になるときに、クラス替えが行われるが、2年次から始まる大幅な選択の授業のために、クラスを中心として授業が少なくなる。また、1年次クラスの友人との結びつきが強いことから、新しい2年次のクラス内に友人関係を築くことができにくく、その結果、2年次のクラスへの帰属意識も稀薄になりがちであった。

(2) 研究実践の目的

こうした問題点を少しでも解消するために、2年次始めにおいても、クラスの友人作りを目的に、本校において初めてのコミュニケーション・キャンプⅡを企画し、実施した。ここでは、その実践内容を紹介し、評価を行うことを目的である。

(3) 研究の方法

コミュニケーション・キャンプⅡ後、生徒に対してアンケート調査を行い、それを分析することによって行う。

2．実施内容

(1) 実施日時、場所、服装等

①日時：平成14年4月10日（水）
時間9 時30分～16時（途中1時間昼休むを含む）

②場所：坂戸市総合体育館　学校の最寄り駅から2駅離れた場所にあり、現地集合にした。近くに住んでいる生徒は、徒歩あるいは自転車で、遠方の生徒は、電車で駅まで来て、その後徒歩で来た。

③服装：運動がしやすいような私服とし、新しいクラスメイトと講師が名前を覚えやすいように、名札を付けさせた。名札には、クラス、出席番号、名前以外に、親しみを持ってもらうために、ニックネームを書かせ、プログラム中は、そのニックネームで呼び合うことにした。

④参加生徒数と引率教員：参加生徒数は、2学年次在籍者全員158 名において、当日2名が欠席したので156 名であった。引率教員は、4クラスの担任4名と副担任4名の計8名であった。

⑤その他：生徒に出来るだけ主体的に取り組ませるために、始めと終わりの講師へのあいさつをＨＲ委員に行わせた。

(2) 実施プログラム

講師は、昨年の黒姫高原で行われた「コミュニケーション・キャンプ」からの継続性を重視し、引き続いて同じ団体に依頼し、前日の夜に黒姫高原から坂戸に到着した。

1クラスを出席番号をもとに1グループ20人の2 グループに分け、それぞれのグループに1講師が付く形に

あった。

プログラムは、名前を呼び合いながら、ボールを投げる自己紹介プログラムから始まった。昨年の初心者を対象とするプログラムと比べると、格段にレベルの高い内容であった。

そのいくつかを示す。その1つは、一定の距離と川とみなし、グループ全員が、1つの岸から別の岸へ渡る「いかだ渡りゲーム」があった。渡り方は、およそ40cm四方の布がいかだとみなし、そのいかだの上を歩いて渡る。しかし、このいかだの上には、1人しかのることができず、人数より少ない数のいかだしかない。また、川の中に置かれたいかだは、人が乗っていないと流れされていくので、前もって問題解決のための方針をグループ全体で話し合い、その後、実行して確かめてみることになる。

その他のゲームとしては、一定の高さにロープを張り、そのロープをフェンスに見立て、グループ全員がフェンスを越えるエレクトリック・フェンスやグループ全員が目隠しをしてロープを持ち、正方形を作るブラインド・パラゴン等があった。

(3) 教員の関わり

教員は、会場の準備、生徒指導、渉外や記録等があり、上記のプログラムのすべてには、参加できなかったが、極力生徒と一緒にプログラムに参加するように心がけた。

3．教員の評価

上記ゲームの特徴は、どれもそれぞれの課題を解決するために、グループごとに解決のためのアイディアを出し合う話し合い、そしてグループの方針を決める活動があり、その後、解決のためのグループ一人一人の協力が不可欠となる。そうした活動を通して、それまでの会話がなかったグループのメンバー間のコミュニケーションが図られ、全員の協力を通して課題解決がなされた際には、大きな達成感を味わうことができたと感じた。

また、課題の解決というグループ共通の目的に対して、一人一人がそれぞれ取り組むことによって連帯感が生まれたのではないかと思われた。その連帯感を通して、新しいクラスメイトとも打ち解けていったようである。

さらに、プログラム実施後、講師を交えて反省会を開き、講師から、それぞれのグループの様子の報告を受け、それぞれの生徒の情報を得ることができ、こうした点からも、非常に有意義なコミュニケーション・キャンプⅡであったと感じられた。引率した教員の中では、非常に有意義であり、評価が高かったが、生徒がこのコミュニケーション・キャンプⅡをどのように受け止めたのかが、問題である。そこで、本キャンプ終了後、アンケートを行い、その回答を分析することによって、本キャンプの評価とする。

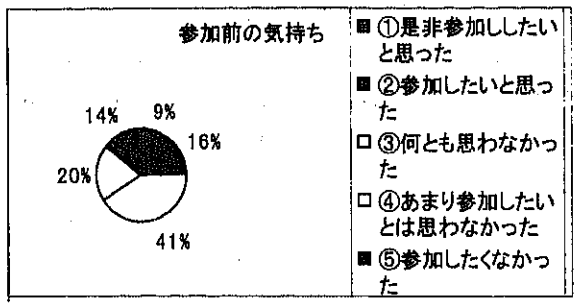
4．生徒の事後アンケート結果

回答数152 で参加者数154 名であるので、98.7%の回答率であった。ここでは、アンケートの結果を分析していく。

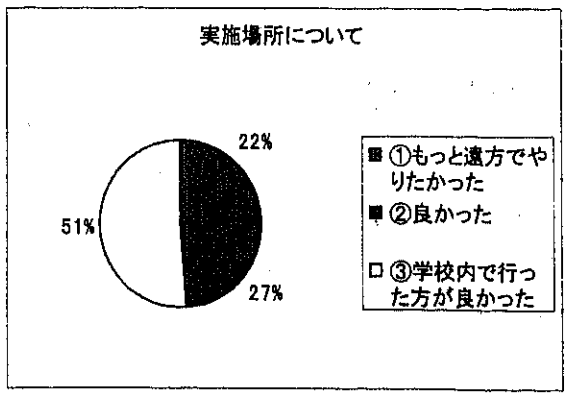
(1) コミュニケーション・キャンプⅡの実施について

「コミュニケーション・キャンプⅡを行うと聞かされたとき、どのように感じましたか。」という質問に対して、「是非参加したい」、「参加したい」と肯定的に受けとめた生徒は、全体の25%程度であり、「あまり参加したいとは思わなかった」、「参加したくなかった」と思った生徒は、34%、「何とも思わなかった」と答えた生徒は、41%であり、ここからこのキャンプに対して、多くの生徒が、それほど期待を寄せていなかったことがわかる。

(2) 実施場所について



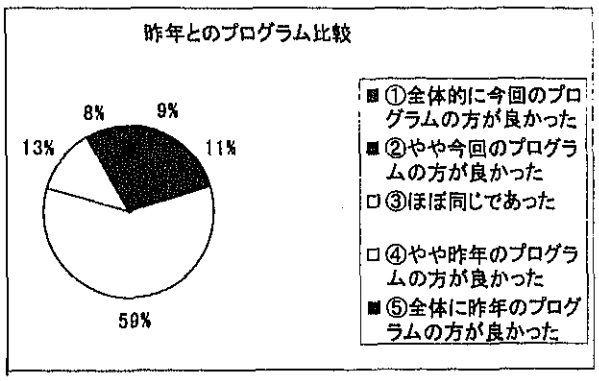
次に、場所についての感想を、「キャンプを坂戸市の体育館で行いましたが、どう感じたか」とたずねたところ、以下のような回答であった。



「もっと遠方でやりたかった」と答えた生徒は、22%、「良かった」と答えた生徒は、27%で、残りの51%は、「学校内で行った方が良かった」と答えている。

これは、日頃からなじみのある場所であったことと、体育館であったため、学校の環境と違和感がなかったためではないかと推測される。もっと遠方でやるかあるいは学校内で行うか、どちらかにすべきであったように思う。

(3) 昨年のプログラムとの比較について

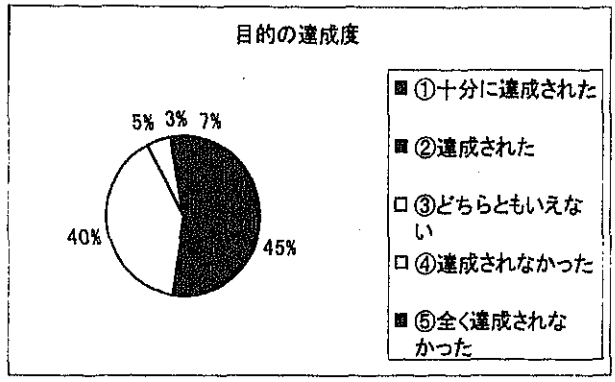


生徒は、1年次のコミュニケーション・キャンプでも同種のプログラムを体験しており、その比較をすることが、このアンケート項目の主旨であった。今回のプログラム提供者である講師側からは、1年次よりも高次のプログラムであると説明があり、また、教員側も1年次の時よりも高度な課題に取り組んでいると思っていたが、生徒の側の印象は、1年時と「ほぼ同じであった」と感じた生徒が59%もおり、プログラム認知の能力に劣るのか、あるいは、自己の成長に対する認知が不十分なのか、こうした結果が出たことに対しては残念であったと思われる。

(4) キャンプの目的達成度について

最後に、本キャンプの主要な目的である「クラスの友人作り」について達成されたかどうかを問うたところ、「十分に達成された」、「達成された」と答えた生徒は、全体の52% であった。逆に、「達成されなかった」、「全く達成されなかった」と答えた生徒は、併せて8%しかおらず、この「コミュニケーション・キャンプⅡ」に対しては、おおむね評価しているようでもあった。

また、「どちらともいえない」と回答した生徒が40%もいたが、その理由をいくつか自由記述から拾い上げてみると、



・「グループ内のいた1年次のクラスメイトと話をしてしまい、別のクラスから来たクラスメイトとは話ができなかった。」

・「クラスの半分の生徒とは、キャンプを通して打ち解けることができたが、別のグループに属した人とは、話をすることができなかった。別のグループの人とも交流が図りたかった。」（同種の回答が、複数あり。）

・「顔見知りが多く、照れてしまい、第1回目のコミュニケーション・キャンプの時にように、素直に自分の意見を言うことができなかった。」等の理由が挙げられており、今後この「コミュニケーション・キャンプⅡ」を継続していくためには改良しなければならない点が、浮き彫りにされているように思われる。

5．結論と今後の課題

本キャンプの試みは、生徒にとってはクラス替え直後の新しいクラス内に友人を作るための良い機会を提供していると思われる。前章の最後のアンケート結果からわかるように、本キャンプが友人作りに対して良い影響を与えていたと見なしている生徒は52% であるが、「わからない」と回答した生徒の自由記述から、改善点や問題点が提示されており、興味深い。

また、教員にとっては、1年次に担任をしていなかった生徒の特性などを知ることができ、クラス経営にとって有意義な生徒の情報を得ることができた。こうしたことから、「コミュニケーション・キャンプⅡ」を実施してよかったといえる。

しかし、まだ不十分な点があり、改良すべき点がある。最後に今後の課題を検討することにする。

今年度と同種のコミュニケーションキャンプである場合、アンケート結果からもわかるように、校内の体育館で行った方がよいのでないかとも思われる。そのことは、場所が「良かった」と答えた生徒が、27%しかおらず、逆に51%の生徒が、「校内」で行った方が良かったと答

えていることからいえる。生徒にとって、坂戸市総合体育館は、一見近いようで、行くまでに時間がかかったようである。もし、校内で行えば、半日で済ませることも可能であるかもしれない。

坂戸からかなり遠方の黒姫高原でしかも、友人のいない状況で行われた「コミュニケーションキャンプ」と、すでに多くの顔見知りや友人があり、坂戸から近くで行われた「コミュニケーション・キャンプⅡ」では、キャンプに対する生徒の心理面での「構え」が、異なっていたことも否めない。75%の生徒が、このキャンプに対して、ネガティブな「構え」を持っており、それは、1年次のキャンプに対する不安感とは異なるものである。その「構え」には、自由記述アンケートに見られたように、「いまさら」あるいは「友人や顔見知りがいることによる照れ」という感情があったのではないかと思われる。今後継続していくためには、こうした生徒の心理状態に対して、どのような手だてを講じるかを考えなければならないと思われる。

また、昨年度と同じ外部講師に依頼したが、本校教師で、同様なことが可能であるか否かは、判断が難しいところである。もし、本校教師のみで行おうとする場合は、前もって準備と練習等を必要とするであろう。